存在していたことを裏付けるのが、この鐘と鰐口なのである。特にこの鰐口は、伝承につつまれた、中世の御嶽神社の社殿の姿を想像させてくれる重要な史料なのである。

この大きな重い鰐口がかかるほどの社殿があったということである。

鰐口とは、鉦鼓（伏せ鉦）を二つ合せた形で、側周の下半分に目と口と呼ばれる裂け目があるので、鰐の口にたとえて鰐口と俗称されたものであろう。正式には鉦（金）で、金口・金鼓などと称されたのである。鰐口は語感から考えても俗称であろう。鰐口なる称の最古例は正応六年（一二九三年）の宮城県・大高神社の鰐口である。近畿地方の例は、この年代で、金鼓（正嘉三年・一二五九年・京都の壬生寺）、金口（建久三年、一一九三年・奈良の長谷寺）とあるので、金鼓、金口が標準的な名称であろう。

御嶽神社の鰐口に「鐘（鏡と誤記するが）」とあるのは、本年の正式名称の「鉦」に近い。新編武蔵風土記稿（巻百十三）棚沢村（奥多摩町棚沢）のところの、多名沢神社鰐口に「武蔵杣保安永鐘之」（文和三年・一三五四年）とあったという記述は、御嶽神社の鰐口の表現の「鐘」と一致し、多摩地方では中世、鰐口を古い正式名称である鐘と呼んだ事情を伝えているのである。

様式について述べると、古い時代の鰐口は吊手（耳）が、魚の背のような輪郭の鉦鼓型で、時代の下降と共に鎌倉時代ごろからΩ型になる。御嶽神社の鰐口は、Ω型に近づいた形をしながらも、まだ鉦鼓型の退化した輪郭である。これは、御嶽の鰐口が古風な様式を残しつつも、下降した様式に近づいているわけで、鰐口の変遷上で過渡期の遺例としても注目されるのである。

一方、古い様式の鰐口は、撞座区の蓮華座がないか、ある場合も、撞座区全体を占めるのに、御嶽神社鰐口は撞座区の径が14・2㎝あるのに対して、蓮華文の撞座の径は7.0㎝と小さくて、鎌倉末期の下降した年代であることを示している。様式上、注目すべき特徴を多くもつ。

奉納者の安部国守は、御嶽神社の創祀者大仲臣国兼と共通の文字「国」を用いている。また、御嶽山の山裾、日の出町大久野にある白山神社の御正体らしい円鏡は、火災にあって不明確なところもあるが、「建武五年ツチノト寅（刁）……アヘノクニモリ鋳奉ラス……」（稲村坦元・武蔵銘記史料集）とある由である。御嶽の鰐口の銘文中の年代・人名と共通しているのである。

入河重吉は、この鰐口の作者で「入河」とあるから、入間郡の人である。入間郡の辺は中世後期から金工・鍛冶工が多いのである。南北朝時代に活躍する有名な金刺重弘は「重」の字が共通するから、この重吉の後裔であろうか。中世初期、武蔵国は、相模国の金工師の製品で占められたが、南北朝期には武蔵国居住の金工製品が多くなる。御嶽の鰐口は、その初期の遺例として貴重である。

御嶽神社の鰐口は、武蔵国の金工史上の意味は重要である。一方、普済寺版経に記録される寄進の人数に「金峯山参詣衆四千二百六十六人」（大方広仏華厳経・巻五）とあって、中世・南北朝時代に多くの参詣人によって打ち鳴らされたわけである。従ってこの鰐口こそ、御嶽山の最も古い時代の信仰の盛行と神社の社殿の規模を今に物語るきわめて重要で大切な遺物といえるのである。

神社の杜（五）

ビジターセンター所長　片柳　茂生

『蟬』

気象庁は今年から、梅雨入り宣言と梅雨明け宣言を明確に行わなくなった。ビジターセンターの日誌を調べると、五月三十一日から七月二十五日まで、晴一字の日が見つからない。だいたいこの期間が御岳山では梅雨だったと言う事になるのだろう。

この梅雨の時期に出現する蟬がいる。エゾハルゼミがそれだ。梅雨の時期の数少ない晴の日あるいは薄曇りの日には、ミョウキン！ミョーキン！ケケケ…と一斉に鳴き始める。その声は、山中に響き、野鳥の声が消されてしまうほどである。

梅雨明けが近づくと今度は、ニイニイゼミが出現する。ただでさえ蒸し暑いのに、ニイニイゼミのチィ――と連続して鳴く声を聞くと、よけいに蒸し暑さを感じる。ニイニイゼミと同じ頃、あるいはそれより少し早くから、ヒグラシも出現しはじめる。ニイニイゼミが日中鳴くのに対してヒグラシは普通、朝と夕方しか鳴かない、しかし時によると夕立が来る前に鳴く事もある。これはあたりが暗くなるので夕方と勘違いをして鳴き出すのだろう。

夏真っ盛りに出現する蟬は、アブラゼミ・ミンミンゼミそれとエゾゼミだ。御岳山では、アブラゼミやミンミンゼミの数は少なく、声を聞く限りではエゾゼミが夏の主役的存在である。エゾゼミは七月の下旬に出現し、九月の中旬までその声が聞かれる。ギィ――と連続して鳴く声は、ぜんまい仕掛けのおもちゃのような音に似ていて、晴れた日の日中によく聞こえる。

ミンミンゼミの名は、その鳴き声からついた名前だと言う事は誰もがご存知の事である。ニュースやドラマ等で、夏の効果音として使われているのをよく聞くが、御岳山で聞くその声はそれに比べて、もっとゆっくりした調子で鳴いているようだ。蟬の声は、気温が高くなるに従って甲高くそして早くなってくる。都内より六度から七度気温が低い御岳山では、当然蟬の声もゆっくりとそしてそれが顕著に聞き分けられる蟬だろう。

八月も中旬を過ぎた頃、やっとツクツクボウシが出現して、御岳山に生息するすべての蟬が出そろうことになる。そして、ツクツクボウシの声に元気がなくなった頃、山はすでに秋の装いに変化を始めている。

『カンタン』夢の枕

官吏登用試験に落ちた慮生という書生が趙の邯鄲の旅宿に泊まり栄華が意のままになると言う不思議な枕を借りて一睡する。夢の中で人生五十年の栄華を送るが、宿の主婦に食事ができたと起こされたとき粟飯を炊くほど短い間の夢であった。人生の栄枯盛衰もすべて一炊の夢であると知り故郷へと引き返す。

能面（邯鄲男）

秋虫の女王「カンタン」

バッタ目コオロギ科の昆虫　体は細長く長さ一二㎜淡黄緑色。触角は糸状で三～四㎝草の間にすみ「リュイ、リュイ、リュイ」と美音を発する。

各地に「カンタンを聴く会」の催しがある。